

前にも云つた様に兵部少輔の政治も決して悪いことのみではなかつたのである。勿論非難の多かつたからには失態もあつたに違ひないが、兵部が非難をうける標的となつたのは、其處に至る理由がある。それは是まで奥山大學が第一のやり手であつて、兵部少輔も一目措かねばならぬ位であるのみならず、兵部少輔が奥山を随分信任して居た頃であるから、大抵のことは遠慮勝ちに控へて居た。それに立花左近將監は親類中の有力者であつて、而も伊達の家政についてはいつも必ず奥山の説を賛成し、奥山の政策に同感を表し、奥山の保護者と云ふ位置を取つて居たから、此人が伊達家の政治に就いて口を利いて居る間は、たとへ奥山が専斷で何事をやつても誰もそれを遮るものがなかつた。然るに立花左近將監はかねて隠居したい氣があつたので、伊達家の政務に就いても餘り口を利かなくなつた。其上に今度自身の保護してゐた奥山が退治されたものであるから、一層沈黙してしまつた。そして寛文四年閏七月に隠居した。是は兵部に取つては目の上の瘤が取れた様なものだ。此に於て兵部と田村の二人で何事をもやるやうになつたのであるが、田村といふ人は病身で根がないのみならず元來お人よしの方であるから兵部少輔に抵抗する程の元氣がない。何事も發案者は兵部少輔で田村は唯だ弱い批評者と云ふ程の役をした許である。それ故に勢ひ兵部一人で何もかもするやうになつた。尤も家老に人物が居れば兵部も専權にはなるまいが、家老の顔觸を詠めても奥山が退役してからはろくな奴はなかつた。唯だその内で中心的人物とも云ふべきは茂庭周防だけであつたけれども、是れも病身になり間もなく死んでしまつた。それに原田甲斐の腕は平凡であるし、古内志摩もえらくはない男であるし、柴田外記も

人柄ばかり好くて遣り手ではない。家老のうちに人物のないこと實に甚だしいものであつた。かういふ所からして目付の職務を重くして遂には萬事これに委任するといふ傾きになつた。そして此時から目付役を以て恰も後見職に直屬した如き位置に立ち政治の機密に携はるやうになつたのは、前にも記した渡邊金兵衛、今村善太夫、里見正兵衛の三人であつた。伊達家にとりて此の目付政治といふものをやつたのが誠に大失策であると思はれる。何んとなれば元來目付役などいふ人は小身だから度量がない。自然に人を服せしむべき家柄でもない。さうして役目が役目だから人の過ちを尤め、所謂毛を吹いて疵を求めるといふ小理屈が多くとても濃厚な政治がやれる柄でない、萬事が御目付流の型にはまつて、法律以外の人情をくみとるなどいふことは出来ないから、何事も理屈話の殘酷に傾き易いのが常であるからである。譬へば町長のやるべき町政を警察署長が代つてやると同じ様なもので、必ず工合よくゆく筈がない。さうして此の目付どもは更にその下役の徒目付など、云ふ更にこそ／＼した法律的の人物を使つて盛んに探偵政治、警察政治の短所を發揮し、家老のことも大身のことでも巨細にこれを誣いて兩後見に密告した。家老大身の身上のことさへも斯様であるから、況してそれ以下の者のことなどは重箱の隅を楊子でほじる様な勢ひでびし／＼素破抜いて恐がらすことを以て寧ろ役目を大切にする忠義の働きたと自信して居た。一體成り上りもの、威張るのはいつも同じことで、權を持たなかつた奴ほど、餘計に權を得たいと焦り、既に權を得れば、物珍しくやたらに之れを振り廻すことは有勝ちのことである。是までは藩の目付役といふものはさう重い役でなかつたのであつて、例へば幕府から國目付の來る時分の如きも、家老と同席して其前に入る様な資格はなかつたのである。然るに今は立派に家老と同席して國目付に會ふやうになつた。それから家老でも其以下の役人でもすべて役人

一 國目付 大名の領國に赴き、その施政を
監察した江戸幕府の役人。

の進退といふものは例の三人の目付が兵部少輔に申し出してやることになつた。且つ又出入司しゅつにふし（會計役）、小姓頭などいふ役はいづれも主管の事務があり、家老に次で政事の機密に預る職掌あづかしかしよくしやうであつたが、それらの役人の會合の席へも必ず目付が顔を出すことになつた。さうして此の目付の役が兵部少輔の腹心のものであつた。田村右京亮うきやうのすけは斯様に目付と家老とを殆ど同格の取扱をするのは悪いと云ふ論であつたらしいが、例の田村のことであれば、それも泣寝入りになつてしまつた。田村の腹の中を知つた目付共は自然田村を煙がけがつて、益々兵部少輔の方へ靡なびいて一向兵部少輔の氣に入るやう氣を利かして働いた。その政治のやり方は以前奥山大學のやつた、大きな網の目のやうな遣り方とは丸で反對であつて、ちよつとの過失でも必ず其恐ろしい眼まなこで睨められるので、家中一統不安の心を懷くやうになり、所謂道路目いはゆるだうろもくを以てすと云ふ様子になつた。兵部并ならびに其配下の目付の方では此状態を見て、これで國中もやう／＼穩おだやかになつたと喜んでであらうが、其實は兵部自身が奥山大學の位置を取つて、藩士の不平と、怨みとを一身に集めたのに過ぎない。奥山の時分には奥山一人で萬事の責任を背負つて居たから兵部は議論の標ま的にされなかつたが、今は兵部一人が善惡ともに藩士の批判を受けることになつた。

二 道路目を以てす 暴君による言論彈壓を意味する言葉 出典「史記」